

# 『とはずがたり』研究

## — 憂き「世」認識に注目して —

金善花\*

### 目次

1. はじめに
2. 出家願望
3. 二條における「世」
4. 二條のあるべき出家遁世のかたち
5. おわりに

## 1. はじめに

『とはずがたり』は巻一から巻三までは二條の宮廷での愛慾生活が、巻四・五では出家遁世して尼になった二條が旅する姿が描かれている。二條の宮廷生活が描かれている巻三までにおいて、二條の出家志向が語られる場面で、「よきついでに憂き世を通れんと思ふに、十二月の頃より只ならずなりにけりと思ふ折からなれば、それしもむつかしくて、しばしさらば隠ろへるて(巻二、一三〇～一三一頁)」、「なべて憂き世を、かかるついでに思ひ通れたく侍る(巻二、一四二頁)」、「憂き世に住まぬ身にもがななど、今さら山のあなたに急がるる心地のみするに(巻三、一七四頁)」と、憂き「世」への認識と出家願望が頻繁に窺える。二條にとって逃れるべき憂き「世」とは何を意味しているのか。ここでの「世」とは憂き「世」として描かれ、逃れたい対象としての「世」である。

『とはずがたり』における出家の動機を巡り、次田香澄は「おそらく院および雪の曙との関係の悪化による人生上の頓挫で出家したのである<sup>1)</sup>」、また今關敏子も「上皇に捨てら

\* 목포대학교 강사 일본고전문학

『とはずがたり』の本文引用は新潮日本古典集成(福田秀一校註、一九七八年)による。なお引用文末に巻・名頁を示した。後深草院は院、有明の月は有明と略して表記した。

1) 次田香澄、「『とはずがたり』本文の問題点」、『國語と國文學』、1965年6月、54頁。

れ、追放されて零落し流浪を餘儀なくされた<sup>2)</sup>」と、二條の出家の理由を男との関係の悪化によって出家を餘儀なくされたという観点から把握する。しかし、二條の出家願望が描かれている場面は14箇所窺えるが、男との関係と関わって、出家遁世への願望が描かれているのは一箇所も見当たらない。それは何を意味しているのだろうか。二條は愛人との性愛関係について、「いと恐ろし」「空恐ろしき」と、自分の意識の中での夫である院に對して、密通の發覺に對して恐れているし、自己の不貞に悩み、不安と恐怖の心理はあるが、その関係に由來して出家遁世を願望するのではないということである。即ち雪の曙、有明、近衛大殿、龜山院との情事が出家遁世の直接の原因ではないということが言える。

本稿では二條が頻繁に語る出家願望の場面、そして出家願望が語られる部分で一具として繰り返して語られる憂き「世」への認識を探ることから二條にとって逃れたい「世」とは何か、そしてその「世」を捨てることの意味は何かということについて追究したい。また、二條の出家が修行という旅のかたちをとって立ちあらわれることに注目して、二條が志向する出家のかたちとの比較から、二條の出家の持つ獨自性について考察する。

## 2. 出家願望

ここでは二條の出家願望が描かれている場面に注目して、二條の出家の獨自性について考えてみたい。二條の出家への意志が最も早く表れているのは父大納言の死によってである。二條は父の死によって出家する人々を見ながら羨ましいと思うが、當時院の子を妊娠中であったから出家を決行することはできない。二條の出家への願望が切實に語られている場面の一つは、自分の産んだ皇子が死んだ時である。世間には披露せず、叔父の隆顯に養育されていた皇子が病氣であることを聞いて、二條は自分の「罪」の報いではないかと心配する。その皇子がなくなって、その時の悲しみを二條は「人間のならひ、苦しくてのみ明け暮る。一日一夜に八億四千とかやの悲しみも、ただわれ一人に思ひ續くれば、しかし、ただ恩愛の境界を別れて、佛弟子となりなん(卷一、七三頁)」と述べている。二歳の時に母に死なれ、十五歳には父大納言も亡くなってしまっており、そして十七歳の時は、自分の運命を變えてくれたかもしれない皇子にも死なれて、據り所をなくしてしまった孤獨感を歎いている。

父母に死なれ、さらには自分の運命を變えてくれたかもしれない皇子にも死なれて、二條は現在の宮廷の生活に限界を感じている。またこの時、院には内緒で、雪の曙との密通

---

2) 今關敏子、「後深草院二條—<色好み>の出家」、「『<色好み>の系譜』—女たちのゆくえ」、世界思想社、1996年10月、144頁。

を續けていた「罪」意識も加わって二條の出家願望は増すのである。

政治的に不利な状況にあった院が出家の意志を表明する場面で、共に出家する人を定めて「女房には東の御方、二條」とされている。東の御方は、東宮熙仁、後に伏見天皇になる人の母である。出家の人数に東の御方と一緒に自分の名前が入っているのを二條は名譽と思うのである。この時の院の出家への意志表明は、結局政治的かけひきに終始し實行されなかったが、当時己の皇子の死によって出家遁世のことだけを考えていた二條にとっては、この時期に出家遁世することは一番理想的であったかも知れない。

しかし、幕府の妥協によって院の皇子が東宮に決められたため、院は出家を思いとどまり、二條は出家遁世を断念しなければならなくなった。二條はこの時の出家遁世の挫折について、「よろづ世の中物憂ければ、ただ山のあなたにのみ心は通へども、いかなる宿執なほ逃れがたきやらん、嘆きつつまた経る年も暮れなんとする頃、いといたう召しあれば、さすがに捨て果てぬ世なれば、参りぬ(卷一、七四頁)」と語る。二條は今回の出家遁世の挫折について、宿執から遁れがたいと心情を述べて、院の強い要請があったので捨てきれず再び出仕したと描かれている。ここで見られる二條の出家願望は、二條個人の意味とは無関係で、院の出家に伴う出家である。そしてこの時の出家挫折も二條の意味とは無関係で、院の出家がうやむやになり、思いが萌した時に訪れた二條の出家遁世も断念せざるを得なくなる。

ここでの出家挫折は二條が宮廷女性であるからこそその挫折である。二條は院の出家宣言に對して、「憂きはうれしき便り」と自分の出家遁世のきっかけとして受け入れて嬉しく思っている。それは二條が常に出家遁世の生き方を憧れていたからではあるが、しかし、その時点で二條は自分の理想とする生き方を選択する権利を持っていない。それは二條の宮廷での立場と深く関わっていると思われる。二條の宮廷での立場に關しては、松本寧至は「妻であるまゑに宮仕えの女房である<sup>3)</sup>」、次田香澄は「彼女は終始院の愛人兼上臘女房<sup>4)</sup>」であると規定している。また辻本裕成は「二條は、<寵人>と呼ばれる院寵愛の女房だったのであり、<帝王の妻妾ではなく、性を以て仕える者><帝王はその寵人の性を完全に所有し、帝王との關係を一方的に放棄されかねなかった>存在<sup>5)</sup>」であったと述べている。辻本裕成の立場からすると、二條は院の意志に背く出家は不可能である。宮廷での二條の立場は「主君・女房」という主従關係にある。そして主君・女房という主従關係は、女房側からは一方的に放棄することはできない。

脇田晴子は宮廷女房の出家に關して「天皇や后妃に仕えた女房たちは、その主人の死

3) 松本寧至、「後深草院二條」、『國文學解釋と教材の研究』、學燈社、1979年8月、146頁。

4) 次田香澄、「愛と現實」、『國文學解釋と教材の研究』、學燈社、1979年8月、91頁。

5) 辻本裕成、「密通と寵人—『とはずがたり』の周辺—」、『『とはずがたり』の諸問題』、和泉書院、1996年5月、14頁。

後、菩提を弔うために出家するのが常であった<sup>6)</sup>と述べている。二條のような立場の女性にとって、一番理想的な出家と言え、自分が仕えた主と共に出家するか、さもないればその死後、後世を弔うために出家することであろう。脇田晴子の指摘から宮廷女房にとって一般論としての出家の理想があるものの、二條の場合は主君が活着している間にその主君から捨てられて出家遁世しているのである。即ち二條は当時、宮廷女性の理想の生き方としての出家のあり方から見ても異常であり奇妙なことであったと言える。その差異を示しているのが宮廷生活で窺える二條の出家挫折である。二條の出家挫折の場面から二條が置かれている特殊な運命が明確に表されていると思われる。それは<寵人>という二條の宮廷での身分と密接に関わっている。そして、このような特別な環境で生きるしかなかった二條において、頻りに描かれている出家願望は自分がどんなに頑張っても出家遁世できなかったことを語っており、その不安・希望を書きつけることに密接に関連している。

<寵人>は「公」的には主君と女房という、「主—従」関係にあるから、主である院に支配される存在であり、制度的には妻妾ではないが、「私」的には院と性的な関係を結ぶ身であるから、意識の中で、「夫—妻」の関係にある。即ち、妻としての権利はないが、「公」「私」ともに支配されてしまう存在であると言える。

『とはずがたり』にも二條の<性>が院によって支配されるふしが見られる。今様傳授の場面で、近衛大殿は「ちと物仰せられん」と大膽に院から二條を呼び出す場面がある。院は「はや立て。苦しかるまじ」と二條を行かせる。この命令に對して二條は「死ぬばかり悲しき」と思いながらも院の命令に従う。二條は「われ過ごさずとは言ひながら、悲しき事を盡くして」と、自分が犯した過ちではないことを強調している。ここからは二條の<性>を支配する院の姿が窺える。また、院の弟である龜山院が二條を兩院(院と龜山院)の傍に寝させることを要求する場面で、院は「ただしは、所狭き身の程にて候ふとて、里に候ふを、にはかに人もなしとて、參りて候ふに召し出でて候へば、あたりも苦しげに候ふ。かからざらん折は(卷三、一八一頁)」と、二條が當時妊娠中であることを理由で断っている。それについて龜山院は、執拗に「わが身は、いづれにても、御心にかかり候はんをば(卷三、一八一頁)」と、自分はどんな女房でも院が気に入る女房がいれば差上げますという記事が見られる。兩院の會話からも當時の女房の<性>が主君に支配されていることがわかる。結局、院は「いたく酔ひ過ぐさせ給ひたるほどに御寝になりぬ」とあって黙認の形で二條を龜山院の所に行かせる。二條は「犯せる罪もそれとなければ」「逃る所なくて宮仕ひるたるも、今更憂き世のならひも思ひ知られ侍る」と、自分の「罪」ではないが、逃れることもできない現実を受け入れる姿勢が見られる。二條が宮廷女性であり、しかも院の寵愛を受ける身である以上、自分の意思で出家遁世を決める権利は持っていない。二條が出家

6) 脇田晴子、「尼僧の生涯」、『中世に生きる女たち』、岩波新書、1995年2月、135頁。

遁世を願いながらも断念せざるを得なかったのは<寵人>という境遇ゆえのことであると  
思われる。<寵人>という二條の立場を考えた時、二條は院からの仰せを拒否できない。  
そしてそれを「いかなる宿執なほ逃れかたきやらん」と、宿世観からする身の因果であると  
捉えることで、自分の意志では出家遁世出来ない現実を認識している。即ち二條の出家遁  
世は、二條が<寵人>である以上、どんなに努力しても不可能な環境であったと言えよ  
う。

### 3. 二條における「世」

二條に逃れたいと思わせる憂き「世」とは何かという問題は、二條が願望する出家遁世の  
意味と不可分の関係にあると思われる。二條が院の<寵人>になる経緯は二條自身の意志  
とは無関係に院と父雅忠との密約によって成立したものである。最初は拒んだものの、二  
夜續けて訪れた院を「これや逃れぬ御契りならん」と述べて、院との関係を前世からの因縁  
として受け入れる。院の正式の妻でもなく、またただの女房でもない中途半端な二條の宮  
廷での立場に對して、父雅忠は不満を漏らす、宮廷ではいつのまにか「大納言の秘藏し  
て、女御参りの儀式にもてなし参らせたる」という噂が立ち、院の正妻である東二條院か  
らは早くも嫌われて、後宮女房の役から除籍されている。このような状況の中で、院の女  
性を手引きしたり、その女性の世話をしたりしても不満を言える立場ではないと認識した  
上で、二條は「世に従ふは憂きならひかな」と述懐している。ここでの「世」とは宮廷生活に  
他ならない。二條は、院を受け入れる場面でそうであったように、宮廷で自分の置かれた  
立場を思い知らされても、そのような状況に對して抵抗するのではなく、かく諦念して受  
け入れるのである。ここでの憂き「世」への認識は、父雅忠が生存している状況下での發言  
であることに注目したい。その「世」とは、院を中心に置いた宮廷生活を表している。やが  
て院の子を懐妊中の最愛の娘に對する心配からこの世に未練を残しつつ、父雅忠は他界し  
てしまい、二條の宮廷での立場はますます不安定になっていく。父の四十九日の服忌を過  
ごしてから宮廷に出仕した二條は、父の不在がもたらした宮廷の冷たい雰囲気から、いよ  
いよ父への追慕の思いを募らせるのである。その上で、二條の言葉として憂き「世」が述べ  
られるのは、皇子の死の時である。愛人雪の曙との間に設けた秘密の子供まで出産してお  
り、皇子の病氣を自分の「身の過ちの行く末」として後ろめたく思っていたが、結局皇子は  
死んでしまい、二條の憂き「世」への認識はより強くなっていく。

三従の愁へ逃れざれば、親に従ひて日を重ね、君に仕えても、今日まで憂き世に過ぎつるも  
心のほかになど思ふより、憂き世を厭ふ心のみ深くなり行くに、(卷一、七三～七四頁)

ここでの憂き「世」への認識は、自分の宮廷生活を支えてくれる後見がないまま、宮廷生活を続けなければならない状況で、自分の将来を期待できたかも知れない皇子の死で、その希望が絶たれた切なさからくるものである。宮廷での自分の位置を支えてくれたかもしれない皇子の死によって、二條の宮廷での立場は院の愛情だけに頼る危ういものとなった。院はたびたび、「われさへ捨つべきやうもなく」と、自分の愛情によってのみ二條の宮廷生活が持続していることを、二條に認識させている。このような二條に自分の不安定な立場を実感させる事件が起こる。『源氏物語』の六條院の女樂を真似びた女樂の遊宴において惹起こした女樂事件である。紫の上として院の妃である東の御方が和琴の役を勤め、隆親の娘の今参りは女三宮の琴を、二條は七歳から習って得意であった琵琶の役で明石上を演じることになる。二條は最初から気が進まなかったが、院の誘いがあり、参加することになる。当日、今参りの「紋の車にて、侍具しなどして参りたる」を見て二條は「わが身の昔思ひ出でられてあはれなるに」と、父在世中の自分の昔のことを思い出している。女樂が始まり、女房の席を整えている所へ隆親が来て、自分の娘の今参りが二條の叔母であること、そして二條の父の雅忠より自分が身分が上であることを理由に二條の座を下へ降ろしてしまう。その恥辱に耐えられず、二條はその場を立ち去り、宮廷から出奔、失踪してしまう。この女樂事件でプライドを傷つけられた二條の出家願望が描かれる場面である。

- (a) よきついでに憂き世を通れんと思ふに、十二月の頃より只ならずなりにけりと思ふ折からなれば、それしもむつかしくて、しばしさらば隠ろへみて、この程過ぐして身二つとなりなば、と思ひてぞゐたる。(卷二、一三〇～一三一頁)
- (b) 「なべて憂き世を、かかるついでに思ひ通れたく侍る」由申すに、「嵯峨殿へなりつるが、思ひがけず、かくと聞きつるほどに、例の人づてにはまたいかがと思ひて」、伏見殿へいらせおはしますとて、立ち入らせ給へり。「何と思はんにつけても、この程のいふせさも、心靜かに」と、さまざま承れば、例の心弱さは、御車に参りぬ。

(卷二、一四二頁)

ここでの憂き「世」認識は、後見がない女性が宮廷という「世」の中で生きることの難しさからくるものであり、そのような自分の境遇を自覚して認識していることを意味している。このような憂き「世」への認識は、二條と有明との関係を知りその上で二人の関係を支配しようとする院の態度から、自分が置かれた立場を認識することによってますます強くなっていく。有明の子供を妊娠中である二條は自分と院との関係が次第に疎遠になっていくことから「憂き世に住まぬ身にもがななど、今さら山のあなたに急がるる心地のみするに(卷三、一七四頁)」と、出家への道を願い、憂き「世」から離れたたいという気持ちを語っている。

今までみてきたように、二條が遁れたく思う憂き「世」の「世」とは、院との関係がその中心にある宮廷生活のことを意味している。それに對して、出家後、二條の東國の旅が始まる巻四の部分で、眼に留めた遊女達の姿を「暮るる程なれば、遊女ども契り求めてありくさま、憂かりける世のならひかなとおぼえて、いと悲し(巻四、二二八頁)」と語っている。客を求めている遊女の姿が「憂かりける世のならひかな」と描かれているのである。ここでの遊女達の「世」とは<はかない男女の仲>を表していると思われる。さらに巻五の西國の旅の部分では、出家遁世した遊女との出會いが描かれている。

遊女の世を遁れて、庵竝べて住まひたる所なり。さしも濁り深く、六つの道にめぐるべき營みをのみする家に生れて、衣裳に薰物しては、先づ語らひ深からんことを思ひ、わが黒髪を撫でて、誰が手枕にか亂れんと思ひ、暮るれば契りを待ち、明くれば名残を慕ひなどしてこそ過ぎ來しに、思ひ捨てて籠りるたるもありがたくおぼえて、(巻五、二八六頁)

ここにおいて、遊女の「世」と宮廷女房の「世」との類比が企てられる。ここでの遊女達が出家遁世する前の「世」とは男との契りを求めて生きてきた「世」である。そしてその「世」を捨てて出家遁世の生活をしている姿が描かれている。ここでの遊女の「世」とは平安時代以來の一般的な概念としての<男女の仲>を意味していると思われる。阿部泰郎が指摘しているように、西行と江口の遊女妙の歌問答の中で、時雨を避ける宿りを拒まれた西行の「世の中を厭ふまでこそ難からぬ假の宿を惜しむ君かな」に對して、遊女は「家を出づる人とし聞けば假の宿に心とむなと思ふばかりぞ」と問答する。ここでは遊女の營みである「假の宿」にかけて輕みを帯びた批判が窺える<sup>7)</sup>。ここでの遊女の「世」とは、かりそめの男女の契りを意味していると言えよう。

一方、二條にとって「世」とは、あくまで宮廷生活、その中での<男(主君)―女(臣下)>、つまり主従関係と重なる「世」である。二條十五歳の時、父雅忠は自らの死を目前にして、獨り残される娘に君に仕えて世に恨みがなければよく仕えるべきだと語っている。そして「君にも世にも」恨みがあって世に住む力がなくなった場合は出家するようにと告げている。そして「世に捨てられ頼りなしとて」という、その「世」も君である。即ち父の遺言で見られる「世」とは、君であり、君の世である。二條における「世」とは宮廷生活を意味しており、もっと正確には君と同義語であり、院と重なる概念で、それは當時の一般的概念である、單純な<男女の仲>としての「世」を意味するのではなく、君即ち帝・院との主従関係の中で、その意味を持つところの君の「世」であると言えよう。

7) 阿部泰郎、「聲わざ人の系譜」、『聖者の推參、中世の聲とヲコなるもの』、名古屋大學出版會、2001年11月、74頁。

#### 4. 二條のあるべき出家遁世のかたち

二條にとって「世」が君の「世」であることを述べたが、その「世」から捨てられた場合の生き方とは、即ち出家することであった。それをふまえて本節では宮廷生活で描かれる、二條のあるべき出家遁世のかたち、二條が目指す出家遁世のかたちについて考察してみる。これは二條にとっての出家の意味を考える上で、重要な要因をなすものであるからである。

父雅忠の死によって後見を失った二條は、宮廷生活での自分の立場の不安定に加えて、院の正妻の東二條院からも嫌われていく中で、「ただとくして世の常の身になりて、静かなる住まひをして、父母の後生をも弔ひ、六趣を出づる身ともがなとのみおぼえて、またこの月の末には出で侍りぬ(卷一、五七頁)」と、早くも出家願望を語っている。院の皇子を懐妊中であった二條が、出産後に出家したいと語って、静かなる住まひを望んでいるのが窺える。また、自分の運命を変えてくれるかも知れなかった皇子の死に直面した二條の出家願望が語られる場面で、「よろづ世の中物憂ければ、ただ山のあなたにのみ心は通へども、いかなる宿執なほ逃れがたきやらん、嘆きつつまた経る年も暮れなんとする頃、いといたう召しあれば、さすがに捨て果てぬ世なれば、参りぬ(卷一、七四～七五頁)」と、ここでも二條は自分の出家の望ましい姿として「山のあなたにのみ心は通へども<sup>8)</sup>」と語っている。二條の<静>を志向する出家遁世への憧れは、次に示すいくつかの場面でも繰り返し語られる。

- (a) 「今は恩愛の家を出でて、眞實の道に思ひ立つに、故大納言の心苦しく申し置きし事、われさへまたと思ふこそ、思ひの絆なれ」など申せば、「われもげに、いとど何をか」と、名残惜しさも悲しきに、薄き單の袂は、乾く所なくぞ侍りける。「かかる程を過ごして、山深く思ひ立つべければ、同じ御姿にや」など申しつつ、かたみにあはれなる事言ひ盡し侍りし中に(卷二、一三三～一三四頁)
- (b) 世の中いとわづらはしきやうになり行くにつけても、いつまで同じながめをとのみあぢきなれば、山のあなたの住まひのみ願はしけれども、心にまかせぬなど思ふも、なほ捨てがたきにこそと、(卷三、一五七頁)
- (c) 心地さへわびしければ、暮るるまで参らぬも、またいかなる仰せをかとおぼえて悲しければ、さし出づるにつけても、憂き世に住まぬ身にもがななど、今さら山のあなたに急がるる心地のみするに、(卷三、一七四頁)

---

8) ここでの「山のあなたにのみ心は通へども」は「み吉野の山のあなたに宿もがな世の憂き時の隠れ家にせむ」(『古今集』雑下九五〇、読人知らず)によると指摘されている。福田秀一、『とはずがたり』新潮日本古典集成、一九七八年。



以上の検討からわかるように、二條の目指す出家のかたちは「静かなる住まひ」「山のあなたにのみ心は通へども」「山深く思ひ立つべければ」と繰り返し語られるように、深い山の中での静かな遁世の暮しであることを確認した。憂き「世」を語る場面で窺える二條が志向する出家のかたちは、俗世との因縁を断ち切って佛道修行に勵む静かな暮らしであるはずである。しかし『とはずがたり』巻四・五には出家した二條が旅する姿が描かれている。二條は自分が目指した静かな暮らしではなく、常に世俗との関わりを持つ旅として、一見正反対の生き方をしているという矛盾を呈す。これは何を語っているのだろうか。勿論、二條の旅への憧れは、彼女自身が明示したように、當時の遁世者の代表者である西行という存在が念頭にあり、自分の旅を西行の旅に重ね合わせようとする意識が窺える。即ち二條は自分の旅を西行のような修行の旅として語っているが、テキストのそれぞれの場面で窺える隠棲への憧れもまた、二條の心情にある出家の理想のかたちであったのは確かである。隠棲と旅という正反対の憧れを同時に語っているのである。このような矛盾は何を物語っているのだろうか。出家後は自分が望んでいた隠棲とは異なる旅という活動的な生き方に飛び込んだ二條であるが、出家前は度々自分が望んだ寺での静かな姿が描かれている。隠棲への憧れを持ちながら、二條の修行のあり方が現実には旅でなければならない必然性があると考えられよう。ここで注目しなければならないのは、出家前の二條においては己が願望する静かな暮らしをしている姿が窺えることである。

二條の憂き「世」への認識を高めた女樂事件により宮廷を出奔した二條は眞願房の僧房を隠れ場所に行っている。醍醐の勝俱胝院の眞願房は二條の一族出自である久我家とゆかりある人で、二條は度々この寺を訪問している。当時懐妊中であった二條がただちに出家することができない状況下で、一族の女性の出家の場であるこの寺で二ヶ月近く滞在している。失踪した二條を探して尋ねあてた雪の曙は「御心ざしの疎かなるにてもなし。兵部卿の老いのひがみ故に、かかるべき事かは。ただこの度ばかりは、仰せに従ひてこそ」と、二條に宮廷へ戻るよう説得している。また、二條を訪れた院も宮廷に戻ると語る場面で、

「なべて憂き世を、かかるついでに思ひ遁れたく侍る」由申すに、「嵯峨殿へなりつるが、思ひがけず、かくと聞きつるほどに、例の人づてにはまたいかがと思ひて」、伏見殿へいらせおはしますとて、立ち入らせ給へり。「何と思はんにつけても、この程のいぶせさも、心静かに」と、さまざま承れば、例の心弱さは、御車に参りぬ。(巻二、一四二頁)

と、院に説得され宮廷に連れ戻されるのを二條は自分の心の弱さのせいであると語っているが、ここでは二條の出家が院の許可を必要とすることを意味していると考えられる。當然、二條の短い隠遁生活も院の説得により妨げられる。即ち二條は自分の意思で遁世を

決行することは難しいと考えられる。それは二條が院と関わる女性であることからくる必然的な制約ゆえではないか。

また、有明との関係が院に知られて、院との関係が疎遠になっていく中で、二條は法輪寺にも籠っている。そして二條自身は納得がいかないまま宮廷から追い出された後も、「何かのための憚りあれば、寶塔院の後に二つある庵室の東なる點じて籠りつつ、今年も暮れぬ(卷三、二〇七頁)」と、二條は自分の心を整理する場として祇園社の庵室を選択している。この祇園社で、「籠りの日数は四百日に餘るを、歸り參らん程は代願を候はせて、西園寺の承りにて車など賜はせられたれば、今は山賤になり果てたる心地して、晴れ晴れしきもそぞろはしながら、紅梅の三つ衣に櫻萌黄の薄衣重ねて、參りて見れば、思ひつるもしく、晴れ晴れしげなり。(卷三、二〇八頁)」と、北山准后九十賀に召されるまで、四百日の間、靜かに修行の生活をしている姿が窺える。

今までみてきたように、二條は出家前には何か辛いことがあれば、自分が常に口癖のように望んでいたように、寺で靜かに參籠生活を過ごしている。宮廷から追放された後も長い間、寺中の庵室生活を過ごしている。即ち、出家前には自分が目指した寺で隱遁の生活を語っているにもかかわらず、出家後は何故旅という生き方ばかりを語るのであろうか。『とはずがたり』にはもう一人、遁世への願望を語る人物がいる。二條と激しい戀に落ちた僧侶有明である。有明は「またいかなる便りをか待ち見ん。念誦の床にも塵積り、護摩の道場も煙絶えぬべくこそ。同じ心にだにもあらば、濃き墨染の袂になりつつ、深き山に籠りゐて、幾程なきこの世に、物思はでも(卷二、一〇九頁)」と、遁世への願望を述べている。

ここでの「濃き墨染の袂」とは、既に出家した僧侶の有明にとって、いわば二重出家というべき遁世を意味している。有明は、現在の自分の身分である御室法親王の地位を捨てて二條と共に深い山の中で籠りたいと述べて、二條にもそのような生き方へ誘う。有明のこのような遁世への志向は、二條との関係が院に知られてしまった後、二條と有明との関係を許す思いの外に寛大な院の處分に對して「さやうにしるき節さへ侍るなれば、若宮を一所渡し參らせて、われは深き山に籠りゐて、濃き墨染の袂になりて侍らん(卷三、一七一頁)」と、院の若宮に自分の御室の座を譲り、自分は「濃き墨染の袂」になって、深い山の中で籠居したいと語っている。この有明の場合は、既に出家した僧侶の希望であることに注目したい。既に出家者である有明にとって「濃き墨染の袂」とは二重出家、即ち遁世を意味していることは言うまでもない。有明は現實の御室という重要な地位を捨てて深い山中に籠る遁世生活を繰り返し願望しているが、はたして有明が全てを捨てて深い山中での遁世生活をするのは現實に實現可能であろうか。有明の場合の遁世は、世を逃れて深い山中で二條と共に閑居する暮らしをも意味しており、有明の破戒を意味することでもある。有明は御室という社會的な地位から離れて佛教の原理に背く破戒を意味する遁世の生活は、そ

の地位にあるうちは難しかったと考えられる。

有明の遁世への願望は、それが実現できない、叶えられないという前提の下での絶望的な志向であったと思われる。そして二條の場合も有明と同じく、山の中での閑居を自分の望ましい出家遁世のかたちとして認識している。しかし改めて問われるべきは、出家した二條が深い山の中の閑居な<静>的な遁世のかたちではなく旅という<動>的なかたちになっているのは何故かということである。有明が自分の社会的地位からして実現できない遁世を望んでいたように、二條の場合も叶えられない環境での願望であったのではないか。何故、二條の出家遁世のかたちが、彼女が常に望んでいた静かな暮らしではなく旅なのかという問題は、遁世が世間から離れて暮すという世間との断絶を意味するのに對して、旅はそれとは正反對の世間との関りを持ちながらの修行であるという、「世」との関わりの差異と深く關っていると思われる。二條の修行のかたちが旅であるのは、寺に定住することでは満たされない何らかの理由があるのを示唆していると言えよう。

## 5. おわりに

二條の出家志向が語られる場面で對になっている憂き「世」への認識から二條にとって「世」とは何かを考察し、その「世」が単純な<男女の仲>の世ではなく、院という上皇とそれに仕える後宮女房という主従関係の許で成立する「世」であることを確認した。帝・院との関係性の中の君の「世」で生きるか、それがうまくいかない場合の生き方として出家か、という二者擇一を提示する、父から娘へのメッセージで見られる「世」も、君であり、君の世である。二條における「世」とは君即ち帝・院との主従関係の中で、その意味を持つところの君の「世」であるのである。以上の検討から、二條の出家は<愛欲の罪から出家遁世へ>といった単純な圖式に歸されるべきではないと言える。二條の意識の中では愛欲を「罪」として認識しておらず、その愛欲の「罪」の苦しみから出家遁世したのではないことは明らかである。それは男達との交情の場面で出家遁世への志向が語られないこと、そして出家遁世への志向が描かれる場面で必ず描かれる憂き「世」への認識を對比してみることによって明らかであろう。更に、その憂き「世」の「世」とは、二條にとっては院との関係を中心に置いた宮廷生活を表すことを確認した。二條が生きる道は、君の「世」で生きるか、それともその君に見捨てられた場合は出家するかの二者擇一的な選擇しか餘地がなかったと思われる。このような二條の生き方は父の娘へのメッセージという形で表現され、それはまるで二條の將來を豫告する複線のようなものである。二條の出家遁世への道は、いわば父のこのメッセージを實踐していると言えよう。

そして宮廷生活のなかで二條が常に志向する出家遁世のかたちが「山のあなた」「静かな

る住まひ」で、表現されるように、二條は寺での定住生活を願望したにもかかわらず、出家後に彼女が実際に選擇した道は旅であった。草庵での隱遁生活とは二條が自分の意志で出家遁世を決められなかったように、實現不可能な状況下での願望であったのではないか。

二條は何故旅という生き方を選択しているのか、そこに西行に憧れながら西行とは異なる二條独自の旅の本質があると思われる。二條の修行のかたちが旅でなければならない必然性があり、それは宮廷女房の出家後の役割とも深く関わるとと思われる。二條は東國への旅の途中、鎌倉に入り、四月から七月まで滞在しているが、その間に將軍交替という大事件を目撃し、將軍惟康親王が廢されて上京する姿を目撃し、やがて下向した新將軍を迎える準備を頼まれ、それに應じる形で、新しい御所のしつらい、そして東二條院から送られた服を裁斷するなど役割を果たしている。また、皇室と深く関わる伊勢でも二條は玉體安穩を祈りつけ、自分も帝・院と関わった人間として王の榮えを祈るのである。鎌倉、伊勢での二條の活動から二條の旅の特徴が表れていると言えよう。宮廷女性である二條の旅の獨自性、そして西行との影響關係については今後の課題にしたい。

## 【参考文献】

- ・阿部泰郎(2001)『聖者の推參、中世の聲とヲコなるもの』、名古屋大學出版會、74頁
- ・今關敏子(1996)『<色好み>の系譜』、世界思想社、144頁
- ・岩佐美代子(1997)『宮廷に生きる一天皇と女房一』、笠間書院、122頁
- ・大隈和雄・西口順子(1989)『尼と尼寺』、平凡社、222頁
- ・勝浦令子(1995)『女の信心一妻が出家した時代』、平凡社選書、72頁
- ・久保朝孝(1997)『悲戀の古典文學』、世界思想社、188頁
- ・國文學解釋と教材の研究(1979)學燈社、91頁・146頁
- ・島津忠夫・上條彰次・廣田哲通編(1996)『とはずがたりの諸問題』、和泉書院、14頁
- ・女流日記文學講座・第一卷(1991)『女流日記文學とは何か』、勉誠社、67頁
- ・女流日記文學講座・第五卷(1990)『とはずがたり、中世女流日記文學の世界』、勉誠社、130頁
- ・田中貴子(1997)『性愛の日本中世』、羊泉社、171頁
- ・中村眞一郎(1975)『日本古典にみる性と愛』、新潮選書、97頁
- ・西口順子(1997)『中世を考える、佛と女』、吉川弘文館、183頁
- ・松本寧至(1971)『とはずがたりの研究』、櫻楓社、149頁
- ・吉田一彦・勝浦令子・西口順子(1999)『日本史の中の女性と佛教』、法藏館、125頁
- ・脇田晴子(1995)『中世に生きる女たち』、岩波新書、135頁

要 旨
-----

『とはずがたり』は巻一から巻三までは二條の宮廷での愛慾生活が、巻四・五では出家遁世して尼になった二條が旅する姿が描かれている。二條の宮廷生活が描かれている巻三までにおいて、二條の出家志向が語られる場面で憂き「世」への認識と出家願望が頻繁に窺える。二條にとって逃れるべき憂き「世」とは何を意味しているのか。ここでの「世」とは憂き「世」として描かれ、逃れたい対象としての「世」である。

本稿では二條が頻繁に語る出家願望の場面、そして出家願望が語られる部分で一具として繰り返し語られる憂き「世」への認識を探ることから二條にとって逃れたい「世」とは何か、そしてその「世」を捨てることの意味は何かということについて追究した。また、二條の出家が修行という旅のかたちをとって立ちあらわれることに注目して、二條が志向する出家のかたちとの比較から、二條の出家の持つ獨自性について考察した。

二條における「世」とは単純な<男女の仲>の世ではなく、院という上皇とそれに仕える後宮女房という主従関係の許で成立する「世」である。二條の出家は<愛慾の罪から出家遁世へ>といった単純な圖式に歸されるべきではない。二條における「世」とは君即ち帝・院との主従関係の中で、その意味を持つところの君の「世」であるのである。

そして宮廷生活のなかで二條が常に志向する出家遁世のかたちが「山のあなた」「静かなる住まひ」で、表現されるように、二條は寺での定住生活を願望したにもかかわらず、出家後に彼女が実際に選擇した道は旅であった。草庵での隱遁生活とは二條が自分の意志で出家遁世を決められなかったように、實現不可能な状況下での願望であった。二條の修行のかたちが旅でなければならない必然性があり、それは鎌倉、伊勢での二條の役割からも窺えるように宮廷女房という二條の置かれた環境と深く関わると言えよう。

キーワード：憂き「世」、出家遁世、宮廷女房、遊女、定住、旅
-------------------------------

투 고 : 2003. 11. 30
--------------------

2차 심사 : 2003. 12. 19
----------------------

3차 심사 : 2004. 1. 8
--------------------

住 所 : (546-800) 전남 보성군 보성읍 신흥2동 915번지

電 話 : 061-852-2773

E-mail : seonhwa8608@yahoo.co.kr